

数年前に、国語教科書から中島敦の『山月記』が消えることが話題になったが、筆者は、これを教科書で読んでいない。記憶に残っているのは、小学校高学年の国語教科書に載っていた内村鑑三の『デンマーク国の話』。小学校低学年の頃、「敗戦日本はスイスを模範とすべし」との言説が巷では多かったが、そのうちに「スイスは永世中立でも国民皆兵だから理想化しすぎるな」との意見が出始めた。そんなわけで、内村による復興デンマークの話は、見習うべき「模範国」の話として新鮮に感じたものだ。

「国の興亡は戦争の勝敗によりません。その民の平素の修養によります。…牢固たる戦敗はかえって善き刺激となりて不幸の民を興します。」とあり、戦後間もなく教科書に引用されたのは、「被害者」としての日本国民を勇気づけるためだったのかもしれない。荒れ地を植林により沃土に変えたとの記述があったことは、よく憶えているが、その他に、その後の日本や世界の問題点を先見していることが、今読んでみて分かり、とても新鮮に感じられた。昔読んだ本を後年に読み直してつまらないこともあり、このように再発見で感動することもある。

1. **小日本主義**：「かならずしも英国のごとく世界の陸面六分の一の持ち主となるの必要はありません。デンマークで足ります。然り、それよりも小なる国で足ります。外に拓がらんとするよりは内を開発すべきであります。」内村が、日韓併合(1910年)の翌年に、このような講演をしたことは、まことに示唆的である。また石橋湛山の小日本主義を先取りしているとも言える。湛山の舌鋒はもっと鋭く、「(少しばかりの植民地経営に汲々としている日本は)積極的に、世界大に策動するの余裕がない。…王より飛車を可愛がるへボ将棋だ」と説いている。内村の植民地反対は、人道的・倫理的見地にもよるのだろうが、湛山と同様に「割に合わない」との現実的判断もあったのではないだろうか。そう推測するのは、内村が『後世への最大遺物』で、第一に「後世に金(かね)を残せ」という実務的な言葉を残しているからだ。

2. **再生エネルギー**：「富は有利化されたるエネルギー(力)であります。しかしてエネルギーは太陽の光線にもあります。海の波濤にもあります。吹く風にもあります。噴火する火山にもあります。」現在の常識を明治44年(1911年)に唱えているところがすごい。

3. **自然環境保護改善**：「(ダルガスによる植樹で)夏期の降霜は全く止みました。……善き気候を与えられました。…砂塵と荒廃を止めました。……洪水の害は除かれたのであります。」

4. **国民教育**：この講演で内村は「教育」という言葉は用いておらず、「宗教」「信仰」の

重要性が強調されているが、以下の言葉から、教育の重要性も説かれていると筆者は感じた。「ダルカスは...土木学者でありしと同時に、また地質学者であり植物学者でありました。.....彼は理想を実現するの術(すべ)を知っておりました。」「国にもしかかる『愚かなる智者』のみありて、ダルカスのごとき『智(さと)き愚人』がおりませんならば、不幸一步を誤りて戦敗の悲運に遭いまするならば、その国はそのときたちまちにして亡びてしまうのであります。」「善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません。」

『デンマルク国の話』は岩波文庫に、『後世への最大遺物』(明治 27 年の講演)と併収されているが、前者だけなら、インターネット

(https://www.aozora.gr.jp/cards/000034/files/233_43563.html) から無料で読める。

以上